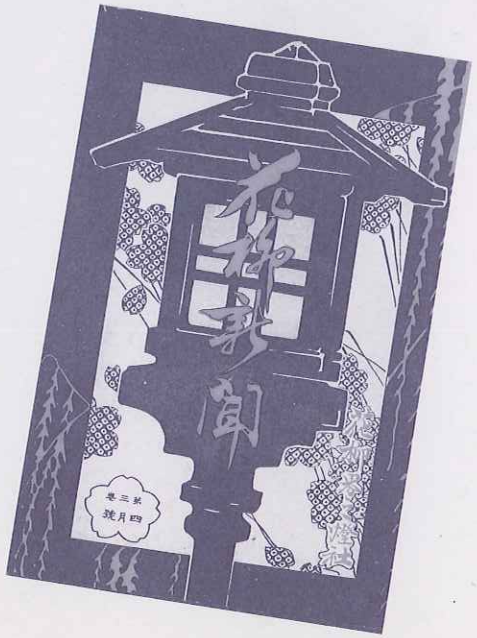

藤野　豊著
性の国家管理
買売春の近現代史

初の本格的な近現代買売春史

広く史料を渉猟し十分な読み込みを行う

鈴木　裕子

本書『性の国家管理』は、そのサブタイトルに「買売春の近現代史」と銘打たれているように、初の本格的な「日本近現代買売春史」と呼ぶにふさわしい労作である。

しかも、著者の基本的視点は、「買春」を女性の性への搾取・暴力・人権侵害ととらえており、評者としてはうれしい限りである。

本書を貫くモティーフと課題については、序章で簡潔に示されているが、それをわたくしなりにまとめれば以下の通りである。

第一に長らく巷間に流布され、正当化されてきた「男性の性欲」が公娼制度や「赤線」などの「疑似公娼制度」を維持させてきたという俗論（「男性神話」）を廃し、「国家はいかに買売春を許容し、維持し、活用したか」について実にきめ細かく検証している点である。

第二に廃娼運動への評価をめぐって、故村上信彦氏に代表されるような、男女共同による人権擁護運動だったとする顕彰的・一面的な評価に対し、性病予防・優生思想・植民地統治等をも視野にからめて進展している最近の公娼制度や廃娼運動の研究成果をも十分に取り入れて、多面的に考察を加えている点である。

第三に、従来の研究で閑却されてきた「存娼論」に系統的な検討をおこない、それと「国家の性管理」という「国策」との絡み合いを明らかにしていることである。

第四に戦前の公娼・黙認私娼制度から「赤線」黙認制度への国策の移行過程を丹念に追い、さらに「売春防止法」に至る「存娼」側、「廃娼」側双方の動きをも視野に収め、複合的に検証し、分析をおこなっていることである。

本書を通読し、わたくしは、「存娼」と「廃娼」の立場がともに「性病予防」という軸では同じ土俵に立っていたこと、また廃娼運動の主流が戦前・戦後にわたって「国際的体面」にとらわれ、「売春女性」に対する蔑視意識を払拭しきれなかったことなどをあらためて確認させられた思いがする。加えて国家が性管理をおこなったゆえんもその根底に「性病予防」用として貧困階級の一部の女性たちを「犠牲」に供し、兵力・労働力となる「男性国民」の健康を防衛するとともに「健康な男性国民」を産み出すいわゆる「良家の子女」たちを守ることにあった、とする著者の見解に賛同する。その延長線上にいわゆる「従軍慰安婦」政策が「国策」として展開されたといえる。

著者は、長年にわたって、ハンセン氏病や優生思想などのテーマを国家による個人の生命・身体の管理・統制ととらえ、実証的研究を重ねておられる。本書にもその視点が一貫して貫かれており、本書が『性の国家管理』と題されるゆえんであろう。

本書は、右に述べたような諸点について、広く史料を渉猟し、十分な読み込みをおこなったうえで論理構成し、わかりやすい叙述で綴られている。研究者に限らず、「買売春」問題に関心をもつ多くの人に読んでほしい一冊である。（すずき・ゆうこ氏＝女性史研究者）

買売春を必要としているのは誰か――
国家による買売春管理を性病予防の観点から解き明かし、
存娼派＝業者側の論理も明らかにしながら、
買売春の近現代史を照射する、
これまでの買売春史の書き換えを迫る意欲作！

性の国家管理
買売春の近現代史
藤野　豊

●定価＝本体二、八〇〇円＋税　A5判／並製／三〇四ページ／カバー装／二〇〇一年一〇月刊

不二出版

●表示価格は全て税別

不二出版
〒113・0023
東京都文京区向丘1・2・12
電話03・3812・4433
ファクシミリ03・3812・4464
振替00160・2・94084

●本書「終章」より

なぜ、国家は買売春を必要とするのか

本書冒頭で紹介したバーン・ブローとボニー・ブローの「売春婦によってしか性的欲求を満たすことのできない男性がいるのはまちがいない」という理解に基づけば、男性の性欲がある限り、買売春を絶やすことはできないということになる。これは、通俗的にも言われていることである。そうだとすれば、買売春を一掃する方法は、多くの男性が確固たる宗教的倫理観を持つか、あるいは買春は性暴力であるという人権認識を持つこと以外にはあり得ない。

では、買売春は男性の性欲の需要のみによって維持されてきたと断言できるだろうか。わたくしは、もうひとつの要因を国家に求める。少なくとも、国策を転換させることにより、買売春を維持させている背景を除去できるのではないか。そのうえで、あとは個々の宗教的倫理観や人権認識の問題となる。本書で追究したのも、近現代日本における国家による買売春管理維持政策であった。

国策としての買売春管理維持政策は、公娼制度と黙認私娼制度として実現される。両者に共通するのは、集娼制であり、性病予防の実施である。したがって、私娼でも、散娼や街娼の形態は取り締まられた。公娼であろうと、私娼であろうと、一定の地域の内側で性病予防策をおこなう限り、国家はその存在を許容したのである。

なぜ、国家は買売春を管理維持したのか。前提として国家は、男性には性欲処理の場が絶対不可欠と考えていた。そし

性の国家管理

買売春の近現代史

藤野 豊

序章／日本近現代史における買売春問題—買売春史研究の概観と本書の課題

第一章／「花柳病」問題の発生

性病予防策としての廃娼論と存娼論／日本花柳病予防会の設立

第二章／廃娼運動の高揚と「花柳病」問題

日本花柳病予防会の再興／花柳病予防法の成立／花柳病予防法下の娼婦／「廃娼法案」の登場／存娼政策の動揺／廃娼論と存娼論の協調

第三章／ファシズム体制下の「花柳病」問題と買売春問題

花柳病予防法の改正／「花柳病」から「性病」へ／「性的慰安」の国家保障／富山県の廃娼

第四章／占領下の廃娼と「赤線」の成立

「民主化」のなかの廃娼／売春等処罰法案・風俗営業取締法案・性病予防法案／地方条例による買売春取り締まり

第五章／売春防止法の成立

人身売買の社会問題化／売春等処罰法案をめぐる論争／売春防止法案をめぐる論争／売春防止法の下の買売春

終章／日本国家の性管理

注文カード

帖合・貴店名

注文数　　冊

不二出版

藤野 豊＝著

性の国家管理—買売春の近現代史

●定価＝本体二、八〇〇円＋税

ISBN4-8350-3868-1

お客様名

電話

注文年月日　　年　　月　　日